

北方領土特別授業（講演録国際シンポジウム2004富山会議第20回記念事業）

## 隣国ロシアとの関係を血のかよったものとするために

木 村 汎（拓殖大学海外事情研究所教授）

### 目 次

はじめに	2
1 日本とロシアとの関係の現状	2
2 日本とロシア---共通の課題	4
3 積極的な協力のメリット	8
4 努力不足---その原因	8
5 平和条約を結ぶ必要	9
6 四つの小骨を解決して血が生き生きと通う関係へ	1 1



<富山県黒部市立鷹施中学校>

## はじめに

おはようございます。私は、富山には4回目の訪問になります。1度目は10年ほど前、まさにこの黒部と魚津にうかがったのですが、あいにく蜃気楼を見ることができませんでした。それ以来、なるべく頻繁におじゃましたいと願っているのですが、蜃気楼は御当地の方でもなかなか見られないらしいですね。

皆さんのような若い方々に向いお話するのは初めてなので、私のお話は難し過ぎるかもしれませんが、一部の方にとっては逆にやさし過ぎるかもしれません。ひょっとして、皆さんのおじいさんやおばあさん、御親戚の中に北方四島から引き上げてきた方がいらっしゃいましたら、あまりにもやさしい話ばかりして物足りなかったという気持ちを抱かれるかもわかりません。皆様の平均的なレベルを考えて、お話ししていきたいと思います。

### 1 日本とロシアとの関係の現状

最初に、今、日本が隣のロシアという国とどういう関係にあるか。——このことについて、お話しします。

ロシアは、日本にとり「遠い隣国」です。私が書いた本の題にもなっています。「遠い隣国」とは、皆さん、おかしいとは思いませんか。ロシアと日本は隣りの国です。ロシアにとっても日本はお隣りの国。隣国というのは、近いから隣りと言うわけでしょう。ところが、私がさらに「遠い」という形容詞の言葉をつけたのは、なぜでしょうか？それは、ちょっとひねってあるからなんですね。

隣国というのは、地理的に近いはず。「近い隣国」と言ったら、それは当たり前のこと。何も改めて「近い」という言葉をつける必要はないでしょう。このように、形容される言葉と形容する言葉との間に矛盾があることを、むずかしい言葉で「形容矛盾」と私どもは呼ぶ。まさにそういう印象を与えて、人々の注意をひくことをねらっているのです。「遠い」という言葉は、「隣国」という言葉につけてはいけない形容詞なんですね。ところが、それにもかかわらずわざとつけた。なぜか？僕には、この本を売りたいために、わざと謎めいた題をつけて、たくさん買っていただきたい。そのような魂胆があるかもしれません。しかし同時に、それが本当の事実だからなんですね。これら二つの国は地理的に近い。だが、関係は遠い。このことを、この題で言おうとしているからですね。

今、日本とロシアの間には、まあまあ関係があります。例えば、小泉純一郎首相はモスクワを二度訪問しました。プーチン大統領は一度日本を訪問して、来年（2005年）には二度目の

日本訪問をする予定です。それぞれの国の一番偉い政治指導者が話し合っていることは、確かです。しかし、毎年一度訪問しているような親しい関係ではなくて、2年に1回ぐらい訪問し合う関係です。

では、外務大臣はどうかといいますと、この間まで外務大臣だった方、皆さんご存じですか。川口順子さんという女の方ですね。その前は田中眞紀子さん、お隣の新潟県の代議士さんですね。今は町村信孝さんという北海道出身の人です。この町村外務大臣とロシアの外務大臣ラヴロフさん（その前はイワノフさん）は、1年に1、2回会っています。それから、それ以外の大臣たちも、相手の国を訪れています。防衛長官も訪れています。そういう意味で、指導者間の交流はまあまあなんですけど、けっして十分とは言えません。

例えば、プーチン大統領はドイツの首相と非常に親しい。1年に8回も訪問しています。ロシアからドイツへは、距離的に近いからです。この前、シュレーダー独首相の誕生日か何かの折には、プーチン大統領は日帰りでドイツを訪問していました。それほど親しい。

だけど、日本へはプーチン大統領はなかなか来日しません。旅行に9時間半か10時間かかるということもあります。ドイツとロシアは、第二次世界大戦で戦争した相手同士の関係なのに、今ではこんなに仲良くなっている。それに比べて、日本とロシアとの関係は、あまりよくない。

では、日ロ間の貿易関係はどうか？

それほど盛んではない。富山県では、伏木富山港などいろんなところでロシアとの交流が非常に盛んです。富山県からはどういうものをロシアに売っておられるのでしょうか。中古車などを売って材木などを買っているのでしょうか。

実は去年、日本とロシアの間の輸入と輸出の量を足しますと、960億ドル位になりました。これは、今までで最高の額。しかし、日本とアメリカ、日本と中国との間の貿易の額と比べると、日本とロシアとの間の貿易は、まだ1/20か1/30でしかない。同じお隣りでも、日本は中国とは間で20倍位の経済交流を行っているのですね。そしてアメリカは、距離の点では遠く離れているのに、ロシアに比べ貿易高が30倍も多いんですね。ということは、日本とロシアの間には、貿易がまだまだ少ないということですね。これはちょっとお隣り同士の国としておかしいのです。お隣り同士は運ぶ運賃があまり要りませんから、貿易が盛んになるはずなんです。

それからもう1つ、日ロ間では貿易がもっともって盛んになってよい理由があります。ロシアは、石油、天然ガス、木材、鉄鉱石などの点で世界で最大の資源国です。他方、日本は、アメリカと並んで世界でもっとも工業が進み、諸外国に自動車や機械を売っている国です。ところが、ロシアの首都であるモスクワの街に行きますと、日本の有名なブランド製品をつくり出している会社は、ロシアへ進出していません。それは世界でも珍しいことです。私も、3週間前にモスクワに行って帰ってきたばかりですが、ナショナル、ソニー、トヨタ、ニッサンとい

う日本で有名な企業のブランド商品は、ロシアではまだまだ値段が高過ぎて売れておりません。

日本とロシアは、相手の国にないものをこちらの国が持っている、あるいはつくるという関係ある二国です。難しい言葉で言いますと、「経済的な相互補完性」——すなわち経済的に互いに補い合う関係にある。ですから、もっともっと貿易が盛んになっていいはずなんです。

次に、日本とロシアとの間では旅行者の数が非常に少ない。

皆さんの中で、ロシアに行ったことがある人はいますか？

皆さんは勉強とか部活動が忙しいから、外国、特にロシアへ行ったことがないでしょう。一般の日本人もそうなんです。皆さんの親戚の方、お父さん、お母さんにお尋ねください。富山県から何人ロシアへ旅行に行っているのかを。ごく一部の方しかロシアへ行っておりません。統計で申しますと、日本人が1億2,000万人位いる。今の日本は豊かになっていきますから、海外に出かける人間は増えています。去年海外に出かけた人は、1,700万人位です。日本人の10人に1人以上が海外に行っている（私のように今年すでに10回も行っているというのはちょっと例外でしょう。）。平均すると、1年に1回くらい日本人の大人の方は外国へ行くんですね。その行き先はほとんど、ハワイ、グアム島、中国、東南アジアといった日本に近い国かアメリカかです。ロシアへは、去年8万6,000人しか行かなかった。1,700万人のツーリストのうちの8万6,000人ということですから、200人に1人。非常に少ない。また、ロシアから日本へ来る人も非常に少ない。富山県は、ウラジオストクやハバロフスクとの関係が日本の中でも最も緊密なところですから、もう少し多いと思いますが、それでもまだまだ満足すべき数ではないでしょう。

## 2 日本とロシア——共通の課題

日ロ関係の現状は、なぜ満足すべきでないのか。現状ではいけない。その理由を、私は2つあげましょう。

まず、もっと仲良くなって協力しなければならない重要な問題を、日本とロシアは、今抱えている。そして、これから21世紀へと進んでいくにしたがって、ますますそうなのですね。相手の国が嫌い、あるいは気に入らない——こういうことでは済まされない問題が、地球上にいっぱい発生しつつあるので例を挙げましょう。

中国という国が、今、どんどん発展しています。中国とロシアとの国境は4,300kmの長さ。中国とロシアは、地上で地続きの隣り合わせの国。中国が、今後どんどん大きくなってゆくということは、隣国のロシアに大きな影響を与えます。日本から、日本と中国も、互いに隣りの国です。今、日本の経済が少し良くなってきたのは、中国の経済が伸びて、中国が日本からモノをどんどん買ってくれるからです。逆に、そのような中国が北京オリンピック(2008年)が行わ

れた後、経済が下り坂になっていたり、何か問題を起こす。すると、日本の経済は再びダウンすると言われていくくらい、中国が今後どうなっていくかということは、日本にとっても大変気になるところです。

もし中国がどんどん伸びていきますと、どうなるか。

中国の人口は、世界の現人口65億人のうちの13億人、4人に1人は中国人と言われるくらい、人口の多い国です。「石を4回投げたら中国人に1度は当たる」というジョークがあるくらいです。その中国人が、日本人と同じような洋服を着て、富山県におけるような良い家に住んだり、ぜいたくな食べ物を食べるようになったらどうなりますか。中国の方々にとっては当然の要求ですが、地球上の食料、エネルギー、石油は、直ちになくなるでしょう。そういう時代が今から20年、30年後に来るとなると、地球に住む我々は、中国について真剣に考えないといけません。

そのようなときに、真っ先に大きな影響を受けるのが、隣りの国です。隣りの国の中国がどんどん大きくなることによって、人口の少ないロシアのシベリア地域へは今、中国人がどんどん入って行っていきます。そういう問題にどう対処したらよいか。ロシアも日本も、このような中国の問題を一緒になって真剣に考えることが大事であり、必要になってきます。いい意味でも悪い意味でも、21世紀における中国問題を協力して共同のチームをつくって、真剣に考えていかないといけない。プラスになる面は大いにプラスになるようにする。逆に、マイナスの面は少なくしていく。是非ともそのようにしなければならぬのです。

次に、北朝鮮の問題があります。

北朝鮮は、放っておくと核開発の方向に進むかもしれません。また、拉致された日本人の方々もいらっしやいます（富山の人も関係されているのでしょうか）。これらの問題を解決しようと思って、「6者協議」というのを北京でやっているのですが、これがなかなかうまく進んでいません。その1つの理由は、日本とロシアがちょっと違う立場をとっているからです。

ロシアはソ連の時代から、北朝鮮は同じ社会主義に属していた国ですから、味方するというか支援しています。それに対して日本は、アメリカなどと同じく資本主義、自由主義、民主主義の国ですから、北朝鮮の体制に少し厳しい態度をとる。それが「6者協議」という会議でも対立となってあらわれ、なかなか意見がかみ合わないのです。しかしこの際、北朝鮮が核を持つということに対しては、ロシアも日本もともに反対しているわけですから、足並みをもう少しそろえる必要がある。そのためには、日本とロシアが基本的に仲良くならなければいけないのです。

もう1つは、エネルギー問題があります。日本が今後も現在の生活水準を維持していこうと

する場合、そして中国をはじめ世界の各国が日本のレベルに追いつこうとする場合、世界全体でエネルギーが当然足りなくなってくる。

東シベリアから運んでくるロシア産の石油のパイプラインのコースを日本向けにしてナホトカまでもってくるか、中国の大慶という所までもってくるか。この問題で2つのパイプライン・コースの候補が争っています。日本案が通ると、中国はそれに対して不満をもつでしょう。ロシアの新聞にも中国の人々が投書して、なぜロシアは日本に味方するのか、との問いを出している。日本はお金があるからなのかと。そういうふうには、エネルギーの奪い合いが行われている。エネルギーをたくさん持っている国が、ロシアです。エネルギーが足りなくなってくると、日本は中国などと競争してロシアからエネルギーを輸入しないとイケない。その意味で、日本とロシアはもっともっと近くなる必要がある。

次に、中国はどんどん人口が増えています。人口増を何とか抑えようとしていますが、それでも人口が増えていく。それに対して、日本もロシアも共通しているのが少子化、つまり子供がだんだん少なくなってきた。ただし、日本は男の人も女の人も世界で一番長生きする国です。これは、魚と野菜をたくさん食べるとか、気候が温暖で四季に恵まれているとか、いろんな理由があります。ロシアは、文明国の中で一番人間の寿命が短命な国です。寒い国である、その他いろんな要因があります。ともあれ、ロシアでは男の人は58～59歳に死亡します。ロシアは日本よりも子供を生む率が少ないいうえに、人間が早く死ぬ。そのために、人口はどんどん減っている。ところが、お隣の中国ではどんどん人口が多くなっている。とくに、シベリアやロシア極東では、1（ロシア）対16（中国）の人口格差なのです。ロシア側に1人の人間がいると、川の向こうの中国側には16人の中国人がいるわけです。16倍の中国人がいる。そのうちの1部がロシア側の広い土地に移住してこようとしている。ロシア人としてはひじょうに怖い。ロシア極東地域は、最終的には中国人たちによって占拠されてしまうのではないかと、そのような気持ちを抱いている。

シベリア・ロシア極東が抱えている問題を解決するには、どうしたらいいか。この地域を発達させたらいいのです。仕事をつくって、人間が温かいところへ、ヨーロッパの方に逃げられないように、引っ越していかないように、食いとめなければならぬ。では、人口の流出を食いとめるための仕事をつくるためにはどうしたらいいか。工場を建てなければいけない。今までは軍隊関係、軍事関係の工場ばかりでした。アメリカとロシアは対立しない時代となりました。ロケット、ミサイル、戦車、鉄砲をつくる必要がなくなった。シベリア&極東地域では、軍需工場は閉鎖されてしまった。それで、仕事がない。

日本が経済協力して、シベリア開発を助けてあげる。シベリアやロシア極東に仕事や新しい

タイプの職場ができれば、そこのロシア人たちが、そこから動かないですみます。日本はおカネを持っている。日本は、今、中国にどんどん投資していますが、その一部のカネをシベリア&極東に投資すれば、ロシアの人は非常に喜ぶわけです。それからまた、日本は科学技術が進んでいますから、黒部ダムをつくったような技術をロシアに教えてあげると、非常にいいと思います。私は、ブラーツクというシベリアのダムを見に行ったことがあります。それ以外のシベリアや極東の地方は非常に困っておりますから、日本が協力してあげればよいのです。

次に、環境問題。今年の夏、富山県の気候はどうでしたか。私は兵庫県の西宮市に住んでおりますが、本当に暑かった。今年の夏は、暑いうえに、台風は来る、地震は来る、つい1週間くらい前からは急に冷え出した。この異常気象は、やはり我々が自動車や工場などで電気などを大量に使うことによって、地球が温暖化して起きている現象なのですね。

そこで、よく新聞を読む方は、ロシアのプーチン大統領が京都議定書に遂に批准したということをご存じかと思います。地球が異常に温くなるのを防ぐために、全世界が環境問題に協力し合わないといけません。一国だけが協力しても、その国の温かくなった空気や砂塵が中国やロシアなどから日本に吹きつけてくる。全世界が知恵を出し合って、環境問題に取り組まないと、地球は滅びてしまうかもしれません。そのような危機にさえ、われわれは直面しているのです。

それから、富山県の皆さんも面している日本海、この日本海の向こう側のウラジオストクのロシアの軍港は、かつての旧ソ連時代には、アメリカに対抗するためのロシアの原子力潜水艦の二大拠点のうちの1つだった。もう1つは、ムルマンスク、すなわちヨーロッパの方の基地です。ロシアの原子力潜水艦は、冷戦が終わった途端に無用となってさびつき、放置されるままとなっている。処理するカネがない。その中から放射能が漏れてきたりすると、富山県が面している日本海の汚染が心配となる。

しばらく以前にも、次のような事件が起こったでしょう。原子力潜水艦ではありませんでしたが、ロシアからの石油タンカーが日本海で沈没して、日本海を汚してしまった。ノリなんかを採集しているおばあさんたちが大変な被害に遭った事件です。

日本海が汚染されることを防ぐためには、日本とロシア、そして中国や両朝鮮が協力し合わなければなりません。そういう意味からも、日本とロシアは、相手が少々嫌いでも協力し合わないと21世紀を生きていくことができなくなる。以上が、私のお話しの第1の重要なポイントです。

### 3 積極的な協力のメリット

第2の重要なポイントは、もし日本とロシアが互いに協力し合えば両方の国にはプラスが多い。得るものが非常に多いということです。

まずこの両国、日本とロシアは地理的に互いに近いわけですから、協力すればいろんな意味でもっと立派に繁栄することとなる。先ほどの経済の観点で言うと、モノを運んでくる運賃が安くつくわけです。次に、旅行者、観光客などのヒトも安く行ける。先ほど私が申し上げたように、日本人は旅行好きですが、ほとんどの日本人が、アメリカを除くと、東南アジアや中国や韓国に行っています。やっぱり遠くに行くとお金もかかるし、時差の苦しみもあります。日付変更線を超えて飛んで行きますと、少なくとも次の一日は、ボーッとします。ところが、上海とかウラジオストクとかハバロフスクとかユジノ・サハリンスクなどは、日本との間の時差がわずか1、2時間しかないから、われわれの身体は平気で現地に適応できます。そういう風に、地理的に近い国は互いにヒトもモノも交流しやすいのです。

もう1つは、両方の国がお互いにはないものを持っていること。ロシアは、世界一のエネルギー・燃料資源大国です。日本は何もない無資源国です。ない国とある国が協力したら、「われ鍋にとじぶた」といいますか、ちょうど良い協力関係になる。日本にはカネ、技術、科学、労働力とか優れた知的能力がある。しかし、これらはロシアにない。シベリア&極東は、とくにそのこれらが必要なのです。

### 4 努力不足——その原因

私は、ここまでは日本とロシアは協力しなければならない。日本とロシアは、協力すると、大きなプラス、メリットがある。こういうお話をしてきました。では、なぜ協力しないのか？なぜ、日本とロシアは、なぜ、もっと交流しないのか？3つの例を挙げて、その理由についてお話ししたいと思います。

まず、ロシアと日本は、相手の国をよく知らない。そのために、相手がいかに自分にとって重要であるかということ、まったく知らない。戦後の日本から言いますと、ほとんどアメリカ一辺倒です。皆さんの中にロシア語を知っている人はいますか。英語ならば、新聞、テレビなど毎日の生活にどんどん出てくるでしょう。では、「さようなら」というロシア語は、何ですか。「大きい」というロシア語は、何ですか。サーカスで有名な「ボリショイ・サーカス」という言葉を知りませんか。「ボリショイ」というのは「大きい」という意味です。

皆さん、人名とか地名などについても、ロシア語よりも英語のほうをよく知っていますね。

皆さんの中には、私よりも英語がベラベラな人さえいるに違いない。だが、ロシア語となると、私のほうが皆さんより上でしょう。ほとんどの皆さんは、モスクワがロシアの首都である、サントペテルブルグ、ウラジオストク、あとはちょこちょこしかロシアのことについては知らないのではないのでしょうか。

「チャイコフスキーがつくった『白鳥の湖』やトルストイの『戦争と平和』は、ロシア語で何て言いますか？」なんて訊くと、皆さんはとたんに言えなくなるでしょう。ところが、英語の小説や映画の題名だったら、「バックトゥーザ・フューチャー」など、この頃は全部片仮名で書いているでしょう。だから、戦後の日本人は、英語が万能で、アメリカ一辺倒です。ロシアは、トルストイ、チェーホフ、ドストエフスキーといった優れた作家、チャイコフスキーという優れた作曲家がいる偉大な国である。このことをすっかり忘れてしまって、勉強しなくなっているのですね。

このことは、ロシア側についても、かなりの程度あてはまることです。ロシアでは、この頃になってようやく「お寿司」という言葉が出回ってきた。「源氏物語」を読まないでいると、知識人として恥ずかしい。若い世代となると、村上春樹の小説を読んでいないと、話題に乗っていけないとなりました。ロシア人は、まだまだ日本人や日本の文化を理解していません。ともに相手国への旅行者が少ないのだから、それは仕方がないのかもしれませんが。

第二に、相手の国が自分にとってどれほど重要であるか。このことを、ともに認めていません。日本人のほとんどが、アメリカ、イギリス、フランス、ドイツと仲良くしているかぎり、ロシアなんてどうでもいいとさえ思っています。もちろん、富山県や新潟県の人とは違います。皆様は、地理的に近いということもあって、日本海側に面していますから、ロシアのほうに目が自然に向かうということはありますが、それでも関心はまだまだ少ない。皆さんには、ロシア語を勉強したりロシアのことにもっともっと関心を持ってもらいたい。

第三の理由。相手の国と真剣につき合おうという態度が、上は政治のトップから下は街を歩いている人々にいたるまで、日本、ロシア両方の国に少ないのです。そういうわけで、今、日本とロシアは潜在的な発展、協力、交流の接触の可能性はある。けれども、それは潜在性、可能性としてあるのであって、現在はその力を十分発揮していない。これが、私の現状の分析なのです。

## 5 平和条約を結ぶ必要

そしてもう1つ、4つ目の理由を挙げます。日本とロシアとの間には、平和条約がない。平和条約というのは、かつて戦争をした国同士、あるいは戦争に近い悪い状態になった国同士が、

「これからは仲良くしましょう。平和にしましょう。」ということで、結ぶものです。その条約が日本とロシアの間には、まだないのです。

第二次世界大戦が終わってから、もうすでに59年たっています。来年で60年になるにもかかわらず、平和条約が結ばれていないというのは、世界中で国際政治の七不思議の一つです。なぜ、日本とロシアは、戦後60年近くになるのに、平和条約が結ばれていないのか。この問題が、オーストラリアの外交官試験にも出たと聞いています。僕の友人が勤めている東京経済大学では、入学試験の問題にも出ました。「北方領土の4つの島の名前を漢字で書いて、なぜ平和条約が結ばれていないのか述べて」と。皆さんも「択捉」って漢字で書けますか。「択」と「捉」という字はひじょうに似ていて、どちらが先に来るのかわからない。「歯舞」「国後」「色丹」は書けるけど、「択捉」という字を書ける人は少ない。

平和条約の話に戻ります。2つの国がこれから仲良くしていくためには、平和条約を結ばなければならないのです。そして、平和条約を結ぶときには、必ず国境がどこかという線を決めておかねばならない。なぜでしょう。それは、国境をはっきり決めておかないと、その後色々なごたごたが起こるからです。国際法の学者は、そのことについて教科書の中で書いています。ロシアの学者ですらそうだと記しています。

皆さんでもそうでしょう。お隣の家と庭が近い場合、どこまでが自分の家の庭で、どこからが相手の庭だということをはっきりさせておかないと、隣近所同士のつき合いで困ることがあります。例えば私が北海道に住んでいたときのことです。北海道の雪は、11月から4月までの約5ヵ月間、「根雪」といいまして、根のようにどっしり積もる。毎朝それを除かさなければ人間が歩く道路ができません。たしかに、毎朝ブルドーザーは来てくれます。が、ブルドーザーは大体大きな道をつくってくれるだけです。ある朝、僕がスコップで雪をかいていると、お隣の人が窓から「私の家の庭へ雪を投げ入れないでください。」とやかましく言われ、遂に気まずい関係となってしまった。

それから、私の家にはありませんでしたが、仮に両方の家の間に柿の木が植えてあるとします。その柿の実がポロンと相手の庭に落ちた場合、どちらがもらっていいのでしょうか。これは、「行列のできる法律相談所」という番組にでも出したいくらい良い問題です。そういうふうに、必ず国境はどこかを決めて平和条約を結ばなければならない。日本は、この線で結びましょう。ところが、ロシアは別のこの線で結ぼうと。大きな2つの島は自分の側がもらいましょう。だけど、(黒板の上に貼られた地図を指しながら)こちらのほう(国後と択捉)はずっと大きいわけですから、こんな小さい2つの島(歯舞と色丹)をもらってもどうか、といった風に。——富山県への引揚者の方のほとんどが歯舞に住んでいた方でしょう。万一歯舞と色丹をもらえればいいと思っておられるかもしれませんが、両島は4島全体の7%しかない小さな地域な

んですね。

皆さんの中には、仲良くするために妥協したらいいではないかと思われる方がいらっしゃるかもしれません。(再び地図を指しながら)日本はこの赤く塗ったところを日本領と言っている。この北に島が18の千島諸島ある。そして、サハリンもサンフランシスコ平和条約で日本は主張しませんと言ってしまった。そういうことで、日本は先に譲歩した。

ところが、ロシアの人は、日本のデパートで物を買うときには、値切れないということを知らないのです。「正札商法」と言います。三越とか高島屋とかの有名百貨店へ行きますと、値切るのは恥ずかしいことです。ところが、3週間ほど前、私がロシアに行って市場に案内してもらったら、どの商品にも値段が一切ついておらず、全部お店の人とお客との間で値段を決めることになっています。そのような国民性の違いもあります。ロシアは、4島でもめているなら、自分のほうは2島とって、あとの2島を日本に、2対2でどうだと言っている。

小泉首相がこの間根室を訪問されたとき、洋上視察の中ではっきりおっしゃっていました。歯舞、色丹、国後、択捉の4つの島の日本主権帰属の主張こそが、わが国の譲れないギリギリの線であると。

しかし、4島のうえには、今、ロシア人が住んでいます。北方四島の対日主権帰属にロシア側が同意しさえするならば、実際に返してもらう時期は少し遅れても構わないと、日本側は譲歩しています。現在そこに住んでいるロシア系住民が、日本流の生活に慣れるか、あるいはロシア本国に帰る荷造りをしたり準備したりするために、少々時間がかかるだろう。したがって、「すぐに出て行きなさい」というようなことは言わない、と。皆さんのおじいさん、おばあさんは「すぐ出て行きなさい」とスターリン下のロシアに言われて、サハリン経由か何かで日本の本土に戻ってこられた。だが、相手(ソ連)がひどいことをしたから、こちら(日本)も同じようなことをしてよいというのでは、世の中はいつまでたっても平和ないい社会になりません。そういう点では、日本は譲りますと言っているのです。

## 6 四つの小骨を解決して血が生き生きと通う関係へ

今、日ロ間の領土交渉はどういう状況にあるのか。プーチン大統領は来年(2005)に来日する予定ですが、日本の立場はけっして変わることはないと思います。4つの島を日本にきちんと返してもらおう。返してもらおうというよりも、初めて国際的に認められる国境線を北方四島の北側に引く。そのかわりに、実際に主権を移すのは少し待ってもいい。こういう条件を出して、日本側は、すでに十分譲歩しているわけです。今度はロシア側が譲歩する番です。

この領土問題が解決しますと、きょうの私の演題にありますように、日本と隣国ロシアとの関係が生き生きと血の通ったものになる。実は、これは私がつくった言葉ではない。ゴルバチ

ヨフさんというロシアの有名な政治家が、日本とロシアとの間の関係は「血が生き生きと通ったものにしなければいけない」と言った。

今はまだ十分生き生きと血が通っているとはいえません。貿易の点からいっても、首脳の訪問頻度からいっても、まだまだ十分ではない。血が生き生きと通うためには、この4つの島——この大きな国から比べると小さなことですが——小骨のように日ロ間ののどに突き刺さっている。4つの骨がのどに突き刺さっていると、血が生き生きと通わなくなる。小さな骨だからいいようなものの、それを長いあいだ放っておくと、それが原因となって喉頭ガンとか悪い病気になる可能性が否定しえない。手術するか何かの方法により、なるべく早くそういうものを除去する。すると、はじめて血がすーっと通い合う状態となる。日本とロシアが血が生き生きと通う関係になり、もっと多くのヒト、モノ、カネなども自由に行ったり来たりするためには、その障害物となっている4つの小さな小骨がとれる、すなわち4つの島の問題が一日も早く解決されることが切望されます。

本書は、平成16年10月29日 富山県黒部市立鷹施中学校における北方領土特別授業（国際シンポジウム2004富山会議第20回記念事業）における講演筆録です。文責は北方領土返還要求運動富山県民会議にあります。

なお、文書、写真のコンテンツの著作権は、講演者・編集者及び第三者が有する著作権により保護されております。これらの情報は、主に教育、広報、情報提供などの目的や、私的使用、引用など著作権法上で明示的に認められる範囲において自由に使用することができます。

<編集者：北方領土返還要求運動富山県民会議>